



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
<http://www.kokubunken.or.jp/>
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

小学校の「平和教育」

—ウクライナへの侵略に思ふ—

小田村直昌

この稿が掲載される時にはウクライナ情勢も大きく変つてゐるであらう。日々メディア、ネット等でウクライナの戦争について色々語られてゐる。そこでは、「日本人として、日本国として、どう受け止め、考へていくべきか」といふ点についても、専門家の方々によって意見が交されてゐる。また、今の日本の現状を考へての議論も散見される。私がよく見るフジTVのプライムニュースでは、ある日、某大学教授が、司会者から「もし日本がウクライナと同じ状況になったら、学生にどのやうに言ふか」と問はれたのに対して、「戦火を逃れて、或いは避けて、命だけは大事にして、いつか国土に戻るまで生き続けなさい」と言ふとの回答であった。私はその時、「本当にそんなことが可能な

のか。領土を失つてもいつか取り戻すことが出来るのであらうか」と自問自答した。答へは「否」である。北方領土や竹島の状況をみれば誰でも分ることと思ふ。このやうな考への背景には戦後教育が大きく影響してゐるのである。

「平和教育」と修学旅行

関西では広島に修学旅行に行く小学校が多い。平和記念公園を散策し、記念館を見学する。そこからは原爆ドームがよく望め、当時のやうな状況であつたのかを子供達は勉強するのである。六年生の子供達にとつては、実際は大変難しいことである。事前に鶴を折り、原爆の子の像に捧げることが定例で、私も引率してゐて、改めて原爆の恐ろしさと思ひを馳せた。唯、この後が如何かと思ふのである。学校によって違ふ

が、「私達は二度と戦争をしません。戦争を起して悪かった」と言ふやうなことを像の前で子供達が唱へたりする。子供が書いた文章ではないことは明らかで、また峠三吉の詩(「にんげんをかえせ」云々)を朗読することも行はれてゐる。

問題は、そのことについて今の教員が何も感じず、或いは当り前に思つてゐる現状である。果して峠三吉の詩を朗読させる意味があるのか。平和が大事であるのは当然のことであるが、「平和を維持する為にはどうしていけばいいか」を考へなければならぬのではないか。しかし、このやうに広島に行くことを「平和教育」の象徴としてゐるのが関西の小学校の現状である。子供達は、学校に戻ると、さらに原爆関係の新聞を作

成して、全児童の前に発表したりする。このやうなことが正に「戦争は悪で、どのやうなことがあつても避け(逃げ)、生き延びよ」との教へに繋がつてゐるのである。

「僕は戦ひます!」との発言

私は子ども達に先の大戦で我が国が国を守るためにどのやうな戦ひをしたかをよく話した。その時、「もしも日本がどこかの国に攻められたら君たちはどうする?」と

問ふと児童から逆に問ひ返された。私は「国がなくなつたり家族が殺されたり、言葉を失ふのは耐へられない。国や家族を守る為に戦ふよ」と返したところ、ある一人の子が「先生!僕は戦ひます!」と言つた。皆びつくりしたやうで、その子の方を振り向いた。勇気のいる発言であり、私はとても感激したのだつた。

今、ウクライナではゼレンスキー大統領のもとで、国民の国を守る意識はとて高く、実際アスリート等も兵に加はつてゐる。自分の国や自分の家族を守るために戦ふのは当然であらうし、黙つて見てゐたり、逃げることは、たとへ生き延びたとしても、どうなるかは自明である。しかし我が国では、戦後教育によって国民は「平和を唱へておれば平和である」「戦はないと言へば生きていける」と思ひ、信じ切り、その精神を脈々と子供達に伝へてゐる。そして「広島で鶴を捧げること」が平和教育だと思ひ込んでゐる。今こそ正にウクライナの人々の生き方を考へ、日本人として目を覚まさせなければならぬのではないか。

(元大阪市小学校校長、元(株)三菱UFJ銀行)